

### リヒャルト・デーメル『女と世界』： イーダをめぐる恋愛

NITTA, Seigo / 新田, 誠吾

---

(出版者 / Publisher)

法政大学多摩論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Hosei University Tama bulletin / 多摩論集

(巻 / Volume)

34

(号 / Number)

別冊

(開始ページ / Start Page)

37

(終了ページ / End Page)

50

(発行年 / Year)

2018-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014857>

# リヒャルト・デーメル『女と世界』

## — イーダをめぐる恋愛 —

新 田 誠 吾

### I. はじめに

リヒャルト・デーメル (Richard Dehmel 1863-1920) は、19世紀末から20世紀初頭にかけてベルリンとハンブルクで活躍した作家である。彼の名を広めるきっかけとなったのが、1897年に発表された『女と世界』(Weib und Welt)である。シェーンベルクは、このうち4つの詩を採り上げて、作品1から3の歌曲を作り、『浄められた夜』(Verklärte Nacht)を弦楽六重奏曲(作品4)にした。しかし、デーメルの名を一躍有名にしたのは、シェーンベルクではなく、『女と世界』に対する「わいせつ罪」と「冒とく罪」での裁判とそれに伴って起きた文壇の論争である<sup>1</sup>。

『女と世界』は、イーダ・アウエルバッハ(旧姓コブレンツ)(Ida Auerbach, geb. Coblenz 1870-1942)という女性との出会い、恋愛の体験から生まれた。デーメルにとっては、自身の芸術観を結実させた作品といえる。

イーダは、結婚前、詩人のシュテファン・ゲオルゲ(Stefan George 1868-1933)と交際し、彼の作品に少なからぬ影響を与えた。イーダが関わった二つの恋愛からどのように作品が生み出されたのか。さらに、デーメルの『女と世界』には作家のどのような考えが反映されているのかを解明するのが、本稿の課題である。

### II. イーダとシュテファン・ゲオルゲ

イーダ・コブレンツは、ライン河畔ビンゲン(Bingen am Rhein)のユダヤ人一家の三女として生まれた。広大なワイン農園と醸造所を所有するコブレンツ家は、

<sup>1</sup> 拙著「リヒャルト・デーメルの『浄められた夜』—1900年前後の創作と検閲—」。法政大学『多摩論集』第30号、2014年3月、p.43-57。を参照されたい。

ワイン製造・販売業を営み、きわめて裕福であった。父親のジーモン・ツァハリアスは、「名誉経営者 (Kommerzienrat)」の称号を持ち、声望ある人物であった<sup>2</sup>。称号は1919年までドイツ帝国にあった制度で、地域福祉に多大な貢献をした経営者に対する叙勲だった。

コブレンツ家の大邸宅の斜め向かいに、ワイン農園を経営するゲオルゲ家のつましい家があった。そのゲオルゲ家の二番目の子が、後にドイツを代表する詩人となるシュテファン (Stefan George 1868-1933) である。イーダは言葉こそ交わさなかったが、幼いころから「シオルシュ・シュテファーン (Schorsch Schtefan)<sup>3</sup>」の存在は知っていた。

1892年、イーダはシュテファンの弟で幼なじみのフリッツ (Friedrich Johann Baptist George 1870-1925) から、兄の初詩集出版の話聞く。後年、イーダはゲオルゲの詩を初めて読んだときの感動をこう述懐している。

右も左もわからない二十歳そこそこの娘だった私が、最初の詩を読んだ瞬間、奇跡は起きた。この手にあるのが何であるかを感じただけでなく、悟った。聞いたこともない言葉の調べに完全に心を奪われてしまった。私はゲオルゲの熱烈なファンになった。世界で最初のファンに<sup>4</sup>。

自分には詩作の才能がないと思いこんでいたイーダの詩人に対する憧憬は、人一倍強かったと考えられる<sup>5</sup>。作品に感動すると、作家に感想や意見を送り、作家個人にも会おうとした。当時ミュンヘンに住んでいたゲオルゲはイーダの手紙を受け取り、返信で自分の詩「対話」(Gespräch)の解釈を求めた<sup>6</sup>。ゲオルゲの課題に合格したイーダは、詩人との交友が始まった。ゲオルゲはビンゲンに戻ってくるたびに足繁くコブレンツ家を訪ね、自分の詩を朗読し、イーダと詩や芸術につ

<sup>2</sup> Julius Bab: *Richard Dehmel. Die Geschichte eines Lebens-Werkes*. Leipzig 1926, S. 181. 以降の記述は、S. 181f. 参照。

<sup>3</sup> Schorsch は Georg の愛称。Schtefan は方言を表記したもの。

<sup>4</sup> Ida Dehmel: *Der junge Stefan George. Aus meinen Erinnerungen*. In: Stefan George – Ida Coblenz: *Briefwechsel*. Hrsg. v. Georg Peter Landmann u. Elisabeth Höpker-Herberg, Stuttgart 1983, S.78

<sup>5</sup> Matthias Wegner: *Aber die Liebe. Der Lebenstraum der Ida Dehmel*, München 2000, S. 54-55.

<sup>6</sup> Bab (1926), S. 183.

いて語り合った。

しかし二人の関係は、同年クリスマスにゲオルゲがイーダに宛てた手紙がきっかけとなって、きしみが生じる。原因は、デーメルに対する評価の違いであった。ゲオルゲは、芸術至上主義を標榜し、「芸術のための芸術」を旨ざしていた。とりわけ、作品内容を何らかの作家の体験や具体的な人、地名に結びつけて解釈することを忌み嫌っていた。『魂の一年』(Das Jahr der Seele)第2版の序文にはこうある。

著者の考えに近づけた人でさえ、『魂の一年』のなかに特定の人物や場所を見つかることができればより深い理解ができるだろうと考えた、[中略] 詩においても、無思慮に人や景色の原型に目を向けることはやめてほしい、原型は芸術によって著しくデフォルメされ、もはや著者にとっても意味のないものになり それを知ることは誰にとっても問題の解明よりは混乱させるものになる<sup>7</sup> (カッコ内は筆者。以下同じ)

ゲオルゲからデーメルの詩集『救済(Erlösungen)』のことを知らされたイーダは、幼なじみのレオ・ゼーリックマンからこの作品を手に入れ、読後の感想をつぎのようにゼーリックマンに返信した。

これは私の想いそのものです。リヒャルト・デーメルは本当にすぐれた詩人の一人です。[中略] この人に会ってみたい。[中略] 彼が愛する女性になってみたい<sup>8</sup>。

イーダのデーメル評価は、ゲオルゲを困惑させた。ウィーンで知己を得たばかりのホフマンスタールに宛ててつぎのように書いた。

つい最近も私に暗い影が差したことがありました。以前大切に思っていた人

<sup>7</sup> Stefan George: *Das Jahr der Seele*. In: Sämtliche Werke in 18 Bänden. Band 4. Hrsg. v. der Stefan George Stiftung, Bearb. von Ute Oelmann, Stuttgart 1991, S. IV. (以下 SW. と略記)

<sup>8</sup> Wegner (2000), S. 91.

が、今では有能か無能なのか、高尚か低俗なのか、わからなくなりました<sup>9</sup>。

それでも、しばらく二人の交流は続いた。二人の関係は、特殊な精神的繋がりであった。

1895年に発表したゲオルゲの詩集『架空庭園』に収められた『架空庭園の書』(Das Buch der hängenden Gärten)は、1893年から94年にかけて書かれた。その18番目の詩に「今日あなたの肉体に触れねば」と始まる詩がある。

Wenn ich heut nicht deinen leib berühre	今日あなたの <sup>・</sup> 肉 <sup>・</sup> 体 <sup>・</sup> に <sup>・</sup> 触 <sup>・</sup> れ <sup>・</sup> ね <sup>・</sup> ば
Wird der faden meiner seele reissen	私の心の糸は切れる
Wie zu sehr gespannte sehne.	引きすぎた弦のように。
Liebe zeichen seien trauerflöre	愛の印は黒の喪章だという
Mir der leidet seit ich dir gehöre.	あなたのものになってから私を <sup>さいな</sup> 苛む。
Richte ob mir solche qual gebühre	こういう苦悩が私にはお似合いとでも
Kühlung spreng mir dem fieberheissen	熱に浮かされた私に冷たいものをかけてくれ
Der ich wankend draussen lehne.	外をふらふらして寄りかかる私に <sup>10</sup> 。

(傍点は筆者。以下同じ)

ゲオルゲは、この詩の手稿をイーダの家に持参して朗読した。後年、イーダはつぎのように回想している。

ある日の午前、ゲオルゲは私と密接な関係にある『架空庭園』の詩篇を持参しました。そして手稿を朗読して帰っていきました。[中略] 数日後、ゲオルゲと私は共通の女友達の家に行きました。[中略] 詩の朗読が終わると、私は「言葉をひとつ変えましたね」と言いました。ゲオルゲの顔に一筋の光が差しました。[中略] 数年後、雑誌『牧神 (PAN)』のために詩の二番目の

<sup>9</sup> *Briefwechsel zwischen George und Hofmannsthal*. 2. Aufl. Hrsg. v. Robert Boeringer, München u. Düsseldorf, 1953, S. 56.

<sup>10</sup> Stefan George: *Die Bücher der Hirten- und Preisgedichte, der Sagen und Sänge und der hängenden Gärten*. In: SW. Band 3, S. 107.

写しを送ってくれたとき、ゲオルゲはこう書いていました。「思い出しましたか？ あのとのお気に召さなかったので一語書き換えました、またここに載せました<sup>11)</sup>」

書き換えた一語とは、1行目にある「肉体 (leib)」である。最初の朗読のあと、「肉体」を「手 (hand)<sup>12)</sup>」に書き換え、イーダと女友達の前で朗読した。イーダはその変更気づいた。しかし、ゲオルゲはイーダの不興を知りながら、あえて「肉体」に戻し、既婚者となったイーダにわざわざ送りつけたのである。

ゲオルゲがイーダに恋愛感情を持っていたとしても、それはイーダには理解しがたいものだった。二人の関係は、イーダの結婚とともに事実上終焉することになる。

私たちはお互い他では見られない関係でした。しかし、それは双方にはまったく異なる意味を持っていました。ゲオルゲのかさついた肌には生気がなく、私はいつも彼の冷たい仕打ちにおびえていました。一緒の時間がどんなに楽しくても、彼の修道士のような性格は私には強烈でした。向こうも私を誤解していました。それはあの人の詩や手紙からわかります。あとから人づてに聞いた彼の話も同じです。今でも、ゲオルゲが優しく賢明に節度を保って接してくれたことに感謝しています。おそらく私への好意を少しでも表したら、二人の関係が吹き飛ぶと感じていたのでしょう<sup>13)</sup>。

イーダの結婚にさいして、ゲオルゲは姉アンナ (Anna Marie Ottilie George 1866-1938) から祝いの言葉を贈るように言われた。しかし、ゲオルゲは何もせず、式から20日ほどたって、自分の写真一枚を同封してイーダに郵送した。写真には一言も添えられていなかった<sup>14)</sup>。

<sup>11)</sup> Ida Dehmel (1983), S. 80f.

<sup>12)</sup> Ute Oelmann: Varianten und Erläuterungen. In: George (1991), S. 144.

<sup>13)</sup> Ida Dehmel (1983), S. 79f.

<sup>14)</sup> Wegner (2000), S. 81.

### Ⅲ. 2つの結婚生活の破綻

#### 1. イーダの場合

1895年4月、イーダはレオポルト・アウエルバッハ (Konsul Leopold Auerbach) と結婚する。この結婚は、イーダの親に勧められたものだった。アウエルバッハ家は、服飾品を扱う小規模事業者で、グリュンダーツァイト (泡沫会社乱立時代) に一財産を築き、その財産でアルゼンチン領事 (Konsul) の称号を手に入れた<sup>15</sup>。

二人は、新婚旅行でパリに行った<sup>16</sup>。そこで二人の興味の違いが明確になる。夫は競馬や高級レストランでの食事を楽しみにしていたのに対し、妻イーダは劇場にしか興味がなかった。ある夜、夫は妻をモンマルトルにあるキャバレー「シャ・ノワール (黒猫)」と「ムーラン・ルージュ」に連れ出した。1881年にロドルフ・サリが開店させた「シャ・ノワール」は、新進のシャンソン歌手、俳優、作家、芸術家といったいわゆる「ボヘミアン」が集う象徴的な場所であった。「ムーラン・ルージュ」は画家ロートレックが出入りし、多くの画を書き、すでに有名なキャバレーであった。夫レオポルトは、「別々にダンスの相手を探そう」と言い、イーダを男性の好奇心視線の中に置き去りにしてしまった。

ベルリンに戻って結婚から5カ月目に妊娠したイーダは、出産までの間、結婚を承諾した自分を責め続けた。イーダの結婚生活は、当時の生活水準から見ても非常に恵まれたものであった。レオポルトも、社会的にはきちんとした人間であり、よき夫であった。それでも、イーダにとって結婚生活は苦痛以外の何物でもなかった。

#### 2. デーメルの場合

デーメルは、1889年5月に、パウラ・オッペンハイマー (Paula Oppenheimer 1862-1918) と結婚し、翌年には娘ヴェラ (Vera) が誕生した<sup>17</sup>。パウラは、ケーテ (Käte) というおそらく10代の女性を住み込みの家政婦として家に入れた。

翌1891年の夏、ケーテをめぐる事件が起きる。それは、デーメルとケーテ

<sup>15</sup> Bab (1926), S. 185.

<sup>16</sup> Wegner (2000), S. 79ff. 参照。

<sup>17</sup> Bab (1926), S. 85f. 参照。

の不倫騒動である。第二子を妊娠したパウラは、6月か7月に、デーメルとケーテをベルリンに残し、娘と北海の保養地に出かけた。その間に、おそらく二人は一度関係を持った。7月19日と25日にパウラに宛てて書いた手紙には、今日の価値観から見れば、デーメルの謝罪よりも自身の正当化とも取れる内容が書かれている。ここで注目すべきは、デーメルの「本性 (Natur)」と「救済者 (Erlöser)」の考え方が投影されている点である。

未熟な子ども二人が、やや暑い夏の夜に理性を失ってしまった。本性と浮気心にワインも手伝って悪さをしてしまった。おまけに勢いに任せて、人にはもっと素晴らしい喜びがあることまで忘れてしまった。しかし二人ともれっきとした人間だし、二人には一回の経験で十分だよ<sup>18</sup>。

ねえ、パウラ、絶対に許さないと本気で思っていないよね!? ——ケーテのこと。

あれは最初で最後。理性は失っていたけど、自分の意志でやったこと。でも、私たち夫婦や子どもたちに対して罪の意識は一切ない。[中略] 人の中に潜む本性を解明するためには、本性でないものを基準にする必要がある。パウラに誠実なことが私の本性だ。悪いことをしても自分の肉体には誠実のように。[中略] もうパウラの身体には指一本触れない。かりに自分が情けない男だと思っていたとしてもね<sup>19</sup>。

以前の自分 [パウラ] に戻って——自分の生活を楽しんで——思うままにいつもの自分になってほしい——そうなれば、私からも、世の中からも自由になれる——ということは、私はあなたの救済者 (Erlöser) になるというわけだ。どうだ、知らなかっただろう。絶対そうしたほうがいい<sup>20</sup>。

パウラは夫の行為を許すしかなかったが、夫婦関係は元通りにはならなかった。

<sup>18</sup> Richard Dehmel: *Ausgewählte Briefe aus den Jahren 1883 bis 1902*, Berlin 1922, S. 49-50.

<sup>19</sup> *ibid.*, S. 45.

<sup>20</sup> *ibid.*, S. 48.



この不倫から2年後の1893年11月、デーメルは神経症になり、ついには家を出て、ハンブルクに住む作家で親友のリリーエンクロン（Detlev von Liliencron 1844-1909）の家に逗留する。一人でイタリア旅行に出かけるが、パウラの重病の知らせを受けて12月中旬にベルリンの自宅に戻る。デーメルの創作意欲は落ち、日記をつけるだけの生活が半年ほど続くことになる。

#### IV. 『女と世界』

デーメルがイーダを知るようになったのは、1895年8月にイーダが書いた手紙がきっかけだった。デーメルは返信でゲオルゲと自分の芸術観の違いを明確にし、「生」に向けた芸術であることを強調している。

ゲオルゲは「芸術」は自分のものだと思っています。私たちはそうは思いません。[中略] 彼らが目指すのは芸術のための芸術で、私たちの<sup>生</sup>の<sup>た</sup>め<sup>の</sup>芸術です。生きるとは多種多様で、選ばれし者のみに許された神殿ではないのです<sup>21</sup>。

デーメルは借りた『芸術草子』を返却するため、8月中旬にイーダ宅を訪ね、そこで恋に落ちた<sup>22</sup>。以降、デーメルはティアガルテンの南側に位置するイーダの家に足繁く通うようになった。ゲオルゲの場合とは異なり、二人の恋愛関係は急速に深まっていった。

この恋愛は、デーメルの創作活動にとって大きな原動力となった。10月17日に、親友で作家のリリーエンクロンに宛てた手紙には、「また詩が書けるようになった。最高に幸せだ。『人生草紙』が出て以来、これまで君に送ってきた詩なんか、駄作だ<sup>23</sup>」とある。この時期に書かれた詩から、『女と世界』が誕生することになる。

扉には、画家ハンス・バルシェック（Hans Baluschek 1870-1935）の挿絵がある。一艘の帆かけ舟の一方には、豎琴ライアーを弾く天使が座り、もう一方には悪魔

<sup>21</sup> Dehmel(1922), S. 207.

<sup>22</sup> 以降の記述は Bab (1926), S. 176ff. 参照。

<sup>23</sup> Dehmel (1922), S. 216.

リヒャルト・デーメル『女と世界』

が船べりに腰掛けてマンドリンを弾いている。舟の側面には詩と読者への謝辞が書かれている。

Erst wenn der Geist von jedem Zweck genesen	何のためにと考えることから解放され
und nichts mehr wissen will als seine Triebe,	自分の欲望以外に耳を貸さないと決めれば
dann offenbart sich ihm das weise Wesen	初めて賢明だったと分かる
verliebter Thorheit und der großen Liebe.	愚かにも恋に落ちて大恋愛になったことが
Euch und Mir in Dankbarkeit	読者諸氏と自身に感謝を込めて

この謝辞には、「思考、精神 (Geist)」と「欲望 (Trieb)」が対置させられている。恋に落ちたことを「愚か」と判断しているが、3行目では、欲望に従い恋を進展させることが賢明という判断に変わる。

舟は、作品の「世界」、を表していると考えられる。右手に天使、左手に悪魔が位置し、これが謝辞にある「思考」と「欲望」に対応する。両者がそれぞれに楽器を持って奏でるのは、この詩集に収められた67篇の詩と2つの散文の調べである。



【図】『女と世界』の挿絵

## 新 田

マストの上に止まる鳩は、キリスト教の「聖霊」の象徴で、『創世記』1章2節の「神の霊が水の上を覆っていた」に因み、海の上に位置している。

詩集に収められた2篇の短い散文『モグラのメルヒェン (Das Märchen vom Maulwurf)』と『茶色の猫 (Die gelbe Katze)』は、それぞれ最初の2番めと最後から2番めに置かれていて、対称をなしている。

最初の詩『ゴンドラの唄 (Gondelliedchen)』は、この詩集へ読者をいざない、冒頭の扉の挿絵にも呼応している。軽快な調子で、マストに止まる鳩に呼びかける。

Bitte, bitte, Vögelchen:	お願い、お願い、小鳥さん
Schiffchen hat 'n Segelchen,	この舟には帆がついてて
segelt übers Meer:	海の上を進んでる
Vögelchen, komm her!	小鳥さん、こっちにおいで!
Komm und setz dich, laß dich wiegen,	来て止まって、ゆらゆらしたら
warum willst du immer fliegen,	どうしていつも飛んでるの
machst es dir so schwer!	大変だろうに!
Singe, kleiner Passagier!	かわいいお客さん、何か歌って!
Wenn die großen Wellen krachen,	ざぶんと大波が来ても
wird dein Lied uns ruhig machen;	歌があれば心が落ちつく
still vergessen wir	静かに忘れていられる
Erde, Mensch und Tier.	地上のこと、人間のこと、獣のこと

この詩は、「日常」、「精神（理性）」、「欲望」からいったん離れて、聖霊の象徴である鳩の歌を聞こうという作者の呼びかけである。

最後に置かれた詩『夜な夜な (Nacht für Nacht)』は、いわば子守唄として、この詩集を締めくくる。

最初と最後の詩を除く63篇の詩は、主題の似通ういくつかのグループに分けることができる。グループの主題は、イーダとの出会いからほぼ時系列的に並べら

## リヒャルト・デーメルの『女と世界』

れていると考えられる<sup>24</sup>。

主題	詩群
出会う前の孤独	『出会い (Begegnung)』から『静寂の街 (Die stille Stadt)』まで
友人の死や別れ	『墓 (Ein Grab)』から『ハープ (Die Harfe)』まで
イーダとの出会い	『ドラマ (Drama)』から『すべて (Alles)』まで
恋の幸せ	『幸せハンス (Hans im Glück)』から 『蛇の檻 (Der Schlangenkäfig)』まで
嫉妬	『警告 (Warnung)』から『飛び立つ (Aufstieg)』まで
三角関係	『指輪 (Ein Ring)』から『声を潜めて (Mit gedämpften Stimme)』 まで
イーダの妊娠	『重苦しい時間 (Aus schwerer Stunde)』から『審問 (Verhör)』

### V. 主題としての「生」、「救済」

『女と世界』の主題は、ひとつはデーメル自身の「生」であり、生き様そのものを作品にしたとって過言ではない。これまでの考察からも、デーメルは人間の「本性」を肯定的にとらえていた。もうひとつの主題は、生きる苦悩からいかに自己を解放するかという「救済」である。

本来キリスト教における「救済」とは、死後に関することであった。しかし、19世紀半ば以降、「現世こそが生活や人間信仰の基本要素であり、人間は自ら世界を作り出し、その世界のなかに永遠や意味がある<sup>25</sup>」と考えられるようになった。さらに、ショーペンハウアーは、生への執着を捨てれば生の苦しみから「救済される」と説いた<sup>26</sup>。こうして、救済とは、死後の話から現世で実現できると信じられるようになった。

<sup>24</sup> Vgl. Bab (1926), S. 194f. および Paul vom Hagen: *Richard Dehmel. Die dichterische Komposition seines lyrischen Gesamtwerks*. Berlin 1932, S.150f.

<sup>25</sup> Thomas Nipperdey: *Deutsche Geschichte 1866-1918. Band I: Arbeitswelt und Bürgergeist*, München 1990, S. 449.

<sup>26</sup> Arthur Schopenhauer: *Die Welt als Wille und Vorstellung I. Kap. 68. Werke I. In: Werke in fünf Bänden*. Zürich 1988, S. 505.

デーメル自身も、「救済」を現世で実現できるものと思っていた<sup>27</sup>。かつてパウラへの愛を通じて、「救われた」経験を持つデーメルは、手紙の中で自分もパウラの救世主になれると考えた。

詩集冒頭の挿絵にある聖霊を表す鳩は、現世での自助努力による「自己救済」というデーメルの考え方がある。1891年9月29日のデーメルの手紙には、自己救済による人間全体の救済が述べられている。

幸福は、一人ひとりが内面や外的状況に応じて自ら心の救済を行うことでしか得られません。しかし、自分や生活を投げうち、人のために何かすることで、その当人が自分を救済しよう、みんなのために尽くそうという気持ちになる。これこそ、私の人生の願望であり、私自身の救済だと心底思っていることです。これまでもこれからもそう思うでしょう<sup>28</sup>。

もうひとつの人間の「本性」は、19世紀末の欧州では人間の生と結びつき、世紀転換期の若い芸術家に大きな影響を与えた。

デーメルの出発点は、ベルリンの「自然主義」運動にある。フランスのゾラによってもたらされた自然主義の理論は、人を科学的に（＝客観的に）観察し、それを再現する（ミメシス）というものだった。

しかし、ベルリンの作家たちはゾラの理論をそのまま受け入れるようとはせず、自ら新しい運動を起こそうとした。それが、ベルリンの「モダニズム運動」になる。これは普仏戦争（1870-71）でフランスに勝ち、統一を成し遂げたドイツ帝国の自信のあらわれでもあり、ドイツ文学、芸術の独自性を確立しようとする試みでもあった。

19世紀末の若い芸術家にとって「生」の概念は中心的なテーマであった。これは、ユリウス・ハルト『人生の勝利（Triumph des Lebens）』、ホフマンスタール『生の歌（Lebenslied）』、ゲオルゲ『生の絨毯（Teppich des Lebens）』など、「生」や「人生」をタイトルに冠した作品が多く出版されたことから見ても明らかである。デーメ

<sup>27</sup> 拙著「自己救済としての詩作—デーメルの初期芸術論—」, 法政大学『経済志林』, 84巻3号, 2017, p.113-125.を参照されたい。

<sup>28</sup> Dehmel(1922), S. 59.

ル自身も『人生草紙 (Lebensblätter)』(1895年)という作品を出版した。ドイツの自然主義文学運動を主導した一人ハインリヒ・ハルトは、生そのものを賛美している。

生きる意味とは何だ？ 我々の人生に究極の目標はあるのか？ その答えはこうだ。「生きろ！」 違う答えをするやつは、無知か現実逃避、あるいは偽善者だ。我々は、生きるために生まれてきたんだ<sup>29</sup>。

この「生」の概念はまったく新しい意味を帯びていた。18世紀の啓蒙時代には、動物と異なる人間の「生」の本質は「理性」であった。理性こそが、人と獣を分けていた。それが、19世紀後半には「本性」に変わる。こうした思想の大転換に影響を与えたのが、ショーペンハウアーとニーチェである。

しかし、人間が本来持つ「本性」のままに生きることは、規範である道徳とは相容れないものである。そのため、こうした考えは19世紀のドイツにあった市民道徳と対峙することになる。

歴史学者ニッパードイによれば、「19世紀の市民道徳は、ヨーロッパの北部地域ではヴィクトリア朝の道徳<sup>30</sup>」であった。かつてなかったほど、「正当な性は結婚に限定されて」いた。性道徳は市民社会で重要な意味を持ち、日常での性はタブー視され、「自己抑制、節制と節度、品位、分別、勤勉、秩序、正常さ」といったものが美德とされた。結婚するにあたっては、「婚前の純潔と結婚後の貞節<sup>31</sup>」が求められた。

しかし、この厳格な市民道徳にも二重基準があった。表向きは市民道徳を守りながら、男性は裏では自分の性欲を満たしていたのである。それはベルリンにおける娼婦の急増にも表れている<sup>32</sup>。ギムナジウム(日本の高校に相当)の高学年や大学生は、最初の性体験を娼婦とする風潮があり、学生のあいだに性病が蔓延する事態となった。1900年には、ベルリンの学生のほぼ25%が性病に感染していると言われた。また、既婚男性が社会階層の低い女性、特に家政婦と関係を持つこ

<sup>29</sup> Heinrich Hart: *Höhen-Aussicht*. In: *Gesammelte Werke*. Band 3, S. 135.

<sup>30</sup> Nipperdey (1990), S. 95.

<sup>31</sup> *ibid.*, S. 96.

<sup>32</sup> *Ibid.*, S. 101.

とも稀ではなかった。性の乱れは都市部では顕著で、性教育者のイワン・ブロッホが「1914年前には、堅実な交際や心の結びつきはすっかりなくなり、自堕落で享乐的な性になってしまった<sup>33</sup>」と嘆いたほどである。

ニーチェは『悲劇の誕生』の「自己批判の試み」で、「生きるとは、本質的に道徳に反すること」と言明した。したがって、道徳とは「生を否定しようとする意志」だとして批判した<sup>34</sup>。

ゲオルク・ジンメルは、「ショーペンハウアーとニーチェ」(1907)という論考で、本性を「心の奥底にあって、もはや意識されないが、現実には常に存在する原理」と規定し、この原理に従って生を構築すべきだと説いた。

生きることが、人に関わる本質的なものをすべて包む言葉になったことで、つまり自己を高めたい、磨きたい、集中して可能性を広げたいという気になり、人生の歩みそのものが価値を高めていく過程になったことで、心の奥底にあって、もはや意識されないが、現実には常に存在する原理に従って理想像を作り上げることが可能になった<sup>35</sup>。

このように19世紀末の世紀転換期に広まった新しい「生」の概念は、人の「本性」を解放し、新たな芸術を生み出す土壌となった。デーメル自身もこうした時代の空気なかで、イーダとの恋愛を作品に結実させたのである。

---

<sup>33</sup> Ibid., S. 100.

<sup>34</sup> Friedrich Nietzsche: Die Geburt der Tragödie, *Versuch einer Selbstkritik*, In: Friedrich Nietzsche: *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe in 15 Bänden*. Band 1. Hrsg. v. Giorgio Colli und Mazzino Montinari. Zweite, durchgesehene Auflage, München 1988, S.14.

<sup>35</sup> Georg Simmel: *Schopenhauer und Nietzsche* (1907) In: Georg Simmel: *Gesamtausgabe in 24 Bänden*. Band 10. Hrsg. v. Michael Behr, Volkhard Krech und Gert Schmidt, Frankfurt a. M. 1995, S. 386.